

岩崎宏之 監修

『土浦の洪水記録—先人が語る水との戦い—』（土浦市史資料集）

土浦市立博物館

2009年3月 39+266頁 2,000円

私の専門とする日本史学においても近年、環境や景観、自然災害などをキーワードとし、地理学ないし自然科学の成果も視野に入れた研究書・資料集が少なからず刊行されている。本書もまたそうした1冊で、近世・近代土浦地域での水害と治水に関する歴史資料を監修者である故岩崎宏之氏が自ら選定し、詳細な解説を付して土浦市史資料集の1巻として刊行された。

監修者の岩崎宏之氏は、病床にありながら本書の念校にも目を通され、その納品を見届けた後、2009年6月13日に72歳で急逝された。氏は、三井財閥を中心とした日本資本主義形成史の研究や、全国の文系・理系の研究者を組織しての文部省科学研究費補助金重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」において沖縄研究の深化と歴史情報発信の方法論の確立に取り組み、国内の学術体制の整備にも尽力された。その一方で、舟運により地域的な結びつきをもった茨城県南地域を常総地域と規定し、大学のみならず地域の研究者をも組織して、水陸交通体系の検討を軸とした総合的地域史研究、および近世後期～幕末に活躍した色川三中・長島尉信の研究にも邁進され、同県内の自治体史編纂・文化財事業にも貢献された。

土浦市は、市史の通史編（1975）・民俗編（1980）完結以降も、歴代市長の理解のもと市史編纂事業を継続してきた希有の自治体の一つである。とくに1988年の土浦市立博物館開館後は、同館を拠点に事業をいっそう推進し、数多くの資料集を刊行してきた。岩崎氏は同館開館以来、同館協議会委員を、また2005年から2007年まで館長を務め、その間には学芸員・職員らと研究会を催し、博物館活動・市史編纂事業の充実にも尽力された。本書は、文字どおりその最後の仕事となった。

本書の本文は、巻頭に監修者による解題「土浦の洪水」を置き、学芸員・職員諸氏による収録資料の「資料解説」の後に資料本文を収める。

収録される資料は、地域の著名な学者・郷土史家による編纂資料・日記から長島尉信「土浦洪水

記」（抄）・寺嶋誠斎「土浦史備考 水火編」・色川御蔭「防逆水」・色川三中「家事志」・色川美年「家事記」、地方文書から旧小松村広瀬家文書・旧飯田村酒井家文書、近代の行政記録・学校資料から茨城県編『茨城県暴風被害一斑』・『亀城会報』・土浦尋常小学校編「昭和十三年六月二十九日大洪水文集」・同校編「土浦郷土読本」・中央気象台編「台風と水害」（抄）である。

巻末には「洪水記録年表」を掲げ、また別添で「利根川周辺広域図」、「土浦城下町図」、「旧町名時代の土浦」の3枚の主題図を付す。

土浦の市街地は、近世には土浦藩庁が置かれて城下町として、近代には茨城県南地域の中心都市として発達した。筑波稲敷台地・新治台地に挟まれた桜川低地の、霞ヶ浦へと流れ込む桜川河口付近に立地する。その地形ゆえに、たびたび洪水に見舞われたのである。本書の刊行により、かかる水害と治水の軌跡を知ることのできる重要かつ基本的な歴史資料を総覧できるようになった。

岩崎氏は、巻頭の解題で、17世紀末、元禄期頃から洪水の記録が現れることに注目し、それは、歴史資料の残存状況の悪さに起因するものではないとする。洪水は、決して有史以来のものではなく、その原因は主に桜川の氾濫と霞ヶ浦の逆水に求められ、これをいわゆる利根川の東遷によって河川流路が人工的に変更され、地域の開発が進んだ結果ととらえる。また、土浦が城下町としての実体を備え、人々がそこで頻発する洪水を災害として認識して記録するようになったと見る。

氏のかかる認識は、近世後期に城下町土浦の町役人を務めた色川三中や、筑波山麓の小田村の名主家に生まれ、水戸藩・土浦藩にも仕官した長島尉信が残した洪水記録の叙述を基に形作られたものである。彼らは、洪水をめぐる状況を風雨と水位の変化から科学的に観察し、その体験を基に過去の水害をも一つ一つ克明かつ論理的に叙述し、洪水に対する対策まで論じたのである。本書で取り上げられた資料は、単なる洪水の年代記としてだけではなく、地域に自生した治水の思想をも追体験できるところに特徴がある。

また、本書は、歴史資料集としては特異な体裁を採っている。自治体史の資料集といえば、難解な漢字・かな交じりの候文を、原文を尊重してそのまま掲載するのが通例である。ところが本書で

は、引用される資料本文すべてを書き下し、新仮名遣いに改めている。これは本書に想定された読者が、歴史学を専門とする研究者ではなく、市民であることを示している。

岩崎氏は、解題のなかで、歴史資料を読むことを通して、いろいろな経験や教訓を得ること、そしてさまざまな歴史を考えることが可能になるとし、地域博物館の役割の一つとしてこの洪水記録を市民に提供したいと述べる。実は、本書に収められた「土浦洪水記」は『長島尉信土浦関係著作集』（2004）に、「家事志」は『家事志—色川三中日記一』全6巻（2004～刊行中）に収録され、氏の指導のもと土浦市立博物館から既に刊行されている。原文にこだわるなら、それらを参照すればよい。逆に、本書は市民が歴史に親しむ入門書となり、原文への関心をも呼び起こす。しかも通読すれば、かかる体裁が本書の価値を下げるものではなく、学界に資するところが大きいことに気づく。かかる編纂方針と成果は、今後の自治体史編

纂のあり方にも一考を促すものである。

蛇足ながら、岩崎氏が生前、とある講演会において、色川三中・長島尉信は学者というよりもむしろ“物知りな隣のおじさん”である、と評したことを思い出す。氏は土浦生まれの土浦育ちで、「土浦居着きの人」である。病を煩い大学の職を辞した後は肩書きのない名刺を用い、学界だけではなく市民に資する資料集の編纂に精力を注いだ氏の晩年の相貌は、同じ「土浦居着きの人」である色川三中への想いに通ずるようにも思われる。今は氏のあまりにも早すぎる御逝去を悼み御冥福をお祈りするとともに、皆さまには御一読をお薦めする次第である。

なお、本書は土浦市立博物館（茨城県土浦市中央一丁目15-18、電話029-824-2928）にて購入可能である。郵送希望の場合は、送料340円分の切手を同封のうえ代金を現金書留または郵便小為替で送付されたい。

（山澤 学）